

障害のある子を養育している保護者の実態（1）

－「養育者の生活スタイル調査」の概要と基礎的資料－

○小林 倫代 ・ 久保山茂樹 ・ 伊藤 由美

（独立行政法人国立特殊教育総合研究所）

key words：障害乳幼児，生活スタイル，養育者

I. 調査の目的

障害のある子を養育している保護者は、精神的・環境物理的な支援が必要である。これまでに障害児を育てている保護者、特に母親のストレス研究や支援の研究は様々に行われている。しかしこれらの研究は、個人の生活スタイルや地域の特色による差異を明確に把握しているものが少ない。保護者が支援を一番必要とする時期は子どもが乳幼児期であることが明らかになっている。そこで本研究では、障害のある子を抱える保護者に対して生活の実状を調査し、個人の生活スタイルや地域の特色を把握した上で、保護者が必要としている支援には、どのようなものがあるのかを明らかにすることを目的としている。本稿では、「養育者の生活スタイル調査」の概要を明らかにすると共に、その基礎的資料を報告する。

II. 調査方法等

1. 調査方法 北海道旭川市・福島県いわき市・群馬県藤岡市・横浜市・富山県黒部市・静岡県沼津市・山口県山口市・福岡県古賀市にある8カ所の障害児関係機関に所属する職員の協力を得てアンケート用紙を作成した。平成15年9月～10月に研究協力者の地元で、アンケート用紙の配布を依頼した。アンケート用紙には返信用封筒を添え、同年12月20日を締め切りとして、記入者からの直接郵送によりアンケート用紙の回収を行った。実際には、平成16年1月まで返送があり、それらについても集計の対象とした。

2. 調査対象 上記の8地域に在住する10歳以下の障害のある子を抱えている保護者を対象とした。

3. 調査項目 「養育者の生活スタイル調査」は、A4版8頁でその内容は大別すると次の6項目からなっている。①家族の実態（家族構成と年代・子どもの養育者・アンケート記入者）、②子どもの実態（子どもの障害・子どもの所属・家庭での過ごし方）、③子育ての実態（子育てで困ったこと・育児の相談相手・地域子育てサークル・子育ての考え方・子育てのイメージ）、④養育者や家族の実態（養育者の生活・養育者の疲労感・養育者の外出・生活全般で感じること・家族の育児協力・住宅・居住地・自家用車の有無）⑤養育者の就労の実態（就労の有無・職業・仕事と育児・過去の就労の有無）⑥自由記述からなる。

III. 基本的統計資料の概要

アンケートは831通配布し、382通の回収があり、回収率は、46.0%であった。

1. 家族の実態

①同居している人数 同居している大人の数とすべての子どもの数を合計し、同居している人数を算出した。同居人数は、2人から9人までであり、同居人数4人が、142件で最も多く、全体の37%であった。次いで3人が88件（23%）、5人が81件（21%）であった。

②近隣に住んでいる親族数 同居していないけれどもそばに住んでいる親族の数は、0人から5人以上までの回答があった。0人が154件（41%）で最も多く、ついで2人の98件（26%）、1人の43件（12%）であった。

③子どもと関わる時間の多い人 母親が最も多く、365件であった。次いで母方祖母の11件、父親の8件、父方祖母の6件であった。複数回答を可としたが、女性のかかわりが多いことがうかがえる。

④アンケートの記入者 母親が最も多く、366件であった。次いで父親が14件であり、父方祖父1件、その他1件であった。

2. 子どもの実態

①子どもの問題 子どもの問題について、「対人関係の問題」「多動傾向」「ことばの問題」「注意・集中の困難」「自閉的傾向」「発達全体の遅れ」「運動の問題」「てんかん」「内臓の疾患」「視覚の問題」「聴覚の問題」「その他」の中から当てはまるものすべてに選択を求めた。「ことばの問題」の回答が最も多く294件であった。次いで「発達全体の遅れ」が219件、「自閉的傾向」155件、「注意・集中の困難」152件、「運動の問題」150件であった（図1参照）。

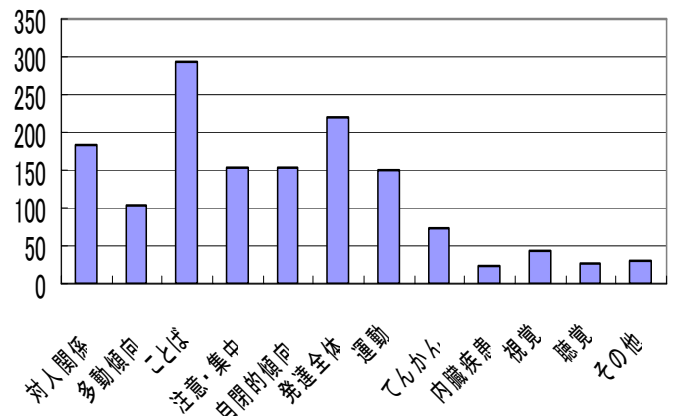


図1 子どもの実態

②子どもの在籍 在籍している機関について、「保育園」「幼児通園施設」「幼稚園」「小学校通常学級」「小学校特殊学級」「養護学校」「聾学校」「盲学校」「なし」「その他」の中から選択を求めた。

「幼児通園施設」に在籍している子どもが最も多く、120件、次いで「養護学校」79件、「保育園」58件、「小学校特殊学級」57件であった（図2では、「聾学校」「盲学校」を「養護学校」に合わせ、「保育園」と「幼稚園」を合わせて示してある）。

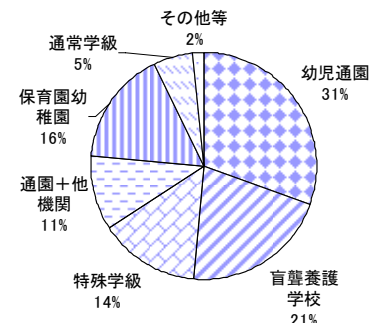


図2 子どもの在籍

今回の一連の発表は、「養育者の生活スタイル調査」の全体的な傾向を報告しているが、今後は、地域別、家族の状態別、子どもの障害別等にこれらのデータをさらに詳細に分析を進めていきたい。

(KOBAYASHI Michiyo・KUBOYAMA Shigeki・ITO Yumi)

障害のある子を養育している保護者の実態（2）

— 子育て中の悩みと相談相手 —

○久保山茂樹 ・ 小林 倫代 ・ 伊藤 由美

（独立行政法人国立特殊教育総合研究所）

key words：保護者支援，子育て中の悩み，相談相手

I. はじめに

障害のある子の保護者が様々な悩みを抱えながら子育てをしていることは言うまでもない。本稿では保護者に対するアンケート調査から、子育て中に感じる悩みの実態と、相談相手としてだれを選択しているか等について明らかにすることによって、保護者支援充実に向け必要な視点を提示したい。

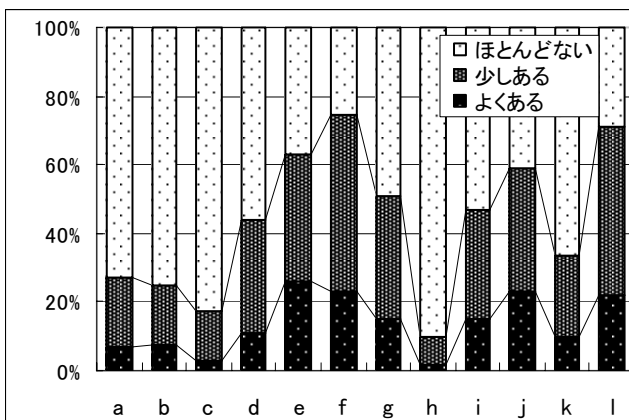
II. 手続き

『養育者の生活スタイル調査』（平成15年9～10月配布、12月回収。回収数382、回収率46.0%）における調査項目Ⅲ「子育てや養育についてお聞きします」のうち、「お子さんを育ててこられて、今までにどんなことに困ったり悩んだりしましたか」、「お子さんのことで相談する相手はどなたですか」、「地域の子育てグループやサークルに参加していますか」の3設問を分析する資料とした。

III. 結果

1. 子育て中の悩み

子育て中に困ったり悩んだりしたことについて、12の小項目（下記a～l）を設定し、それぞれについて「よくある」「少しある」「ほとんどない」の3段階から選択回答を求めた（図1参照）。



a. 家族からもっと子どもの世話をするようにいわれて b. 子どもを産んだ時期が適切だったかどうか c. 我が子と相性が悪いのではないかと d. 近所の人に子どもを比べられて e. 我が子は育てにくい子だと感じて f. 子どものために仕事や趣味を制約されて g. 近所に子育てについて話し合える人がいなくて h. 祖父母に子どもをとられるように感じて i. 子どもの具合が悪いとき手助けしてもらえなくて j. 近所に子どもを遊ばせるところがなくて k. 祖父母と子どものしつけの方針が合わなくて l. 子育てから離れて自由になれないと

図1 子育て中の悩み

ここでは全12小項目のうち、「よくある」と「少しある」を合計して、その割合が高かった6項目について述べる。割合が最も高い小項目はfとlの2つで、これらは子育てから解放されず、自分の時間が持てないという保護者の生活スタイルにかかわる内容である。続く小項目eとjは育てにくさや遊び場のなさで、保護者が子ども

とかかわる際に感じている悩みである。次に続く小項目gとiは、話し相手のなさや保護者自身に対する支援のなさであり、保護者が感じている孤独感や孤立感とも言える。

2. 子育てグループやサークルの利用状況

地域で行われている子育てグループやサークルへの参加状況について選択肢で回答を求めた。回答の内訳は、「参加している」が137(36%)、「していたがやめた」45(12%)、「参加していない」194(50%)、「無回答」6(2%)であり、全体の半数が地域のサークルやグループへの参加経験がなかった。

次に、参加していない194名について、理由を選択肢（複数回答可）で回答を求めた。回答の内訳は「近くにグループがない」が70、「参加の必要性を感じない」が58、「人間づきあいが苦手だから」21、「仕事等があるので参加している時間がない」49、「その他」51であった。「その他」の自由記述には「どんなものがあるかよく知らない」「他の子と比べてしまい嫌な思いをしてしまう」「障害児では受け入れてもらえない」「これ以上は子どもの体力的にも時間的にもできない」などが見られた。

3. 子育ての相談相手

子どものことで相談する相手について、選択肢によって3番目まで回答を求めた。そのうち「もっとも頼りになる方」に対する回答を表1に示した。「夫婦間」という回答が200(51%)で約半数を占めており、「親・きょうだい・親戚」と合わせると、全体の66%が家族や親戚を相談相手にあげていることになる。一方、「幼稚園保育園学校の先生等」(9%)や「専門家」(8%)は「幼稚園保育園を通した友人」(8%)と同じ程度の回答数であった。

表1 もっとも頼りになる相談相手

| 選択肢 | 人数 |
|--------------|-----|
| 夫婦間 | 200 |
| 親・きょうだい・親戚 | 59 |
| 幼稚園保育園学校の先生等 | 33 |
| 専門家(医師保健師等) | 30 |
| 幼稚園保育園を通した友人 | 29 |
| 友人(幼稚園保育園以外) | 3 |
| その他 | 26 |
| 誰もいない | 2 |

IV. おわりに

子育て中の悩みについては、仕事や趣味を制約されとか話し合える人がいないなど、保護者自身の生活スタイルに関わる内容が多い事が明らかになった。このことから、保護者支援を行う上で、育児に関する知識や方法の提供だけでは不十分であり、いわゆるレスパイトサービスや障害児保育の拡充など、保護者自身に対する支援につながるサービスの充実を図る必要があると考えられる。また、地域での気軽に話し合える場である育児サークルの利用を勧めるようなはたらきかけも有効であろう。その際には子どもに障害がある事に留意しサークルの活動内容を吟味する必要がある。

今回の調査では「もっとも頼りになる相談相手」として「先生」や「専門家」をあげた回答は多くなかった。その理由は明らかではないが、「先生」「専門家」が保護者の信頼を得るよう、より一層の努力をする必要があると考えられる。

(KUBOYAMA Shigeki・KOBAYASHI Michiyo・ITO Yumi)

障害のある子を養育している保護者の実態（3）

— 保護者が日常感じている思い —

○伊藤 由美 ・ 小林 倫代 ・ 久保山茂樹

（独立行政法人国立特殊教育総合研究所）

key words：保護者，生活への思い，アンビバレント

I. はじめに

障害のある子を養育している保護者にとって、精神的・環境物理的な支援は不可欠である。特に乳幼児期の子どもを抱えた保護者は最も支援を必要としていることが明らかになっている。本稿では、障害のある子を養育している保護者が、日常感じている生活全般への思いを取り上げ整理し、保護者が必要とする支援体制を構築する際の一視点となることを目的とする。

II. 手続き

障害乳幼児を抱えている保護者に対し、「養育者の生活スタイル調査」（平成15年9～10月配布、12月回収。全回収数382、回収率46.0%）をおこなった。このうち、子育てや養育についての質問項目の中から、「保護者が生活全般について感じていること」について取り上げ、分析資料とした。

III. 結果

保護者が日常感じていると思われる気持ちについて(a)～(p)の16項目を設定し、各項目について「よくある」、「時々ある」、「あまりない」、「全くない」の4段階で回答を求めた。結果は、全回答を各項目ごとに集計し、割合で示した（図1参照）。

その結果、項目(a), (b), (c), (g), (i), (l), (m)については、「よくある」もしくは「時々ある」という回答の占める割合が多く、特に項目(c), (g), (i), (l), (m)では70%以上の回答であった。逆に項目(e), (f), (h), (o)については「あまりない」「全くない」という回答が占める割合が多かった。ここから、障害のある子を養育している

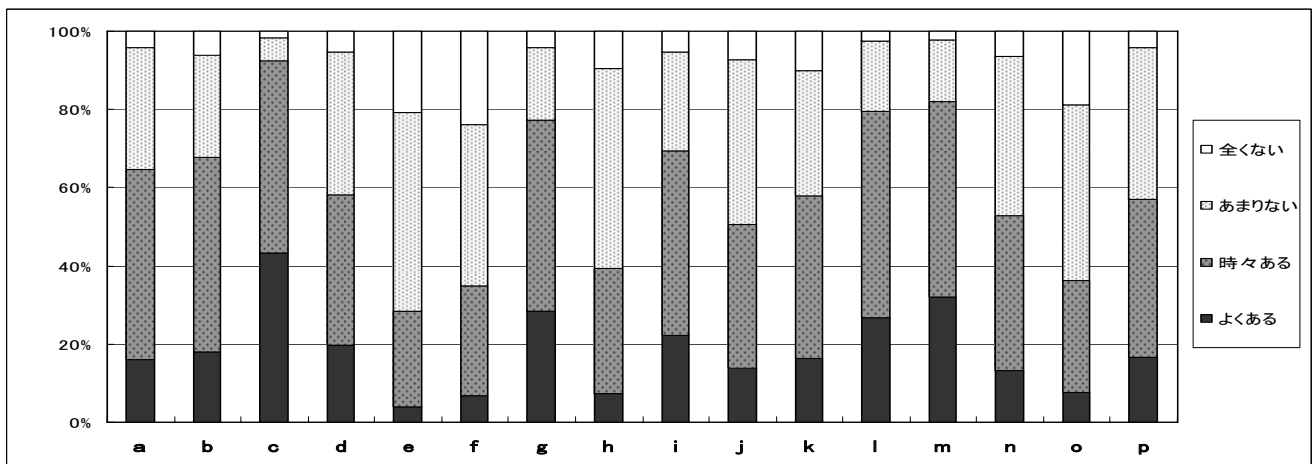
保護者は、普段の生活に何となく疲れたり、自分の思うようにならず、時には現在の生活から解放されたい感じさえ持つ人が多い。しかし、日々の生活の中で小さなイライラや疲れといった負担を感じている反面、生活に楽しさや頑張り甲斐も感じている人が多いということが分かった。また、社会からの疎外感や孤立感を感じている人が少ないことも分かった。項目(d), (i), (j), (k), (n), (p)については、「ない」と感じている人と「ある」と感じている人の割合に大きな差は見られず、さらに、「あまりない」もしくは「時々ある」と低い頻度で感じているという回答が多かった。

IV. おわりに

今回の調査結果から、障害のある子を養育している保護者は、日々の生活の中で精神的、身体的に大きな負担を感じながらも、自分の生活や養育に楽しさや価値を感じていることから、非常にアンビバレントな気持ちで日常生活を送っていることが推察される。

子どもの障害、年齢、保護者を取り巻く環境に対し、精神的・環境物理的な支援がどれだけ充実しているかによって保護者の負担は大きく異なる。また、保護者の負担の軽減が生活全般において感じる思いにも大きく影響する。それゆえ、先に述べた要因に加え、地域性も加味し、保護者の生活へのアンビバレントな感情がどのような要因に大きく関係しているのか整理し、その理由についても詳細に検討することが今後の課題である。その上で、生活全般と養育に対するサポート制度について検討することが必要だと考える。

(ITO Yumi・KOBAYASHI Michiyo・KUBOYAMA Shigeki)



- a. 家族の中で自分だけが苦勞しているように感じる b. 誰かにねぎらいや感謝のことばをかけてほしい c. なんとなく疲れがたまる d. 自分のがんばりの割には生活が楽ではないと思う e. 今の生活には頑張り甲斐がないと思う f. 自分のやっていることが意味のあることなのか疑問に思う g. 時には全てのことから解放されたいと思う h. 今の生活には創造的な要素が少ないと思う i. 自分の生活が自分の思うようにならないと思う j. 自分が本当にしたいことが犠牲になっていると思う k. 今の生活は同じことの繰り返しばかりだと感じる l. 今の生活は楽しいと思う m. 小さなことでイライラしてしまう n. 今の生活は我慢ばかりだと思う o. 自分が世の中の動きから切り離されているように感じる p. 日々、自分が成長していると思う

図1 保護者が感じている生活全般への思い

障害のある子を養育しながら就労している保護者(1)

— 就労の実態と子育てとの両立の課題 —

○小林倫代・久保山茂樹・伊藤由美
(独立行政法人国立特殊教育総合研究所)

I. 目 的

障害のある子を抱える保護者の生活の実状を知り、個人の生活スタイルや地域の特色を把握した上で、保護者が必要としている支援を考えていくことは重要なことである。筆者らは「養育者の生活スタイル調査」を実施し、この課題に迫っている。本稿では調査の概要と就労している保護者、特に母親の実態を明らかにする。

II. 方 法

1. 調査方法 平成15年9月～10月に北海道旭川市・福島県いわき市・群馬県藤岡市・横浜市・富山県黒部市・静岡県沼津市・山口県8地区・福岡県古賀市にある8カ所の障害児関係機関に所属する職員の協力を得てアンケート用紙の配布を依頼した。アンケート用紙には返信用封筒を添え、記入者からの直接郵送によりアンケート用紙の回収を行った。

2. 調査対象 上記の8地域に在住する10歳以下の障害のある子を抱えている保護者を対象とした。382件の回答があり、回収率46.0%であった。

3. 調査項目 「養育者の生活スタイル調査」は、A4版8頁で、内容は大別すると次の6項目からなっている。①家族の実態(家族構成と年代、養育者、アンケート記入者)、②子どもの実態(障害、所属、家庭での過ごし方)、③子育ての実態(子育てで困ったこと、育児の相談相手、子育てサークル、子育ての考え方とイメージ)、④養育者や家族の実態(養育者の生活、疲労感、外出、生活全般で感じること、家族の育児協力、住宅、居住地、自家用車の有無)⑤養育者の就労の実態(就労の有無、職業、仕事と育児、過去の就労の有無)⑥自由記述からなる。

III. 結 果

1. 養育者の就労の有無

設問「あなたは現在、働いていますか」に対する結果は、「働いている」127件、「働いていない」245件、無回答10件であった。このうち、母親が記入した回答を抽出し集計すると、「働いている」118件、「働いていない」240件、無回答9件であった。回答した母親の32.2%が就労していることが分かった。

2. 就労している母親の職種と勤務形態

職種について「自営業(企業経営者含む)」「会社員」「農・漁業」「パート・アルバイト」「公務員、学校教職員、団体職員、医療・社会福祉関係職員(保育士など)」「内職」「専門的職業(医師、弁護士、税理士など)」「その他」の中から選択し回答を求めた。その結果、就労している母親は「パート・アルバイト」が53件(44%)で最も多く、次いで、「公務員、教育・医療・社会福祉関係職員」21件(18%)、「会社員」20件(17%)であった。

また、勤務形態を「日勤の定時勤務」「三交代制などの変則勤務」「その他、夜間や短時間勤務」の中から選択し、回答を求めた。その結果「日勤の定時勤務」39件(33%)、「三交代制などの変則勤務」7件(6%)、「その他、夜間や短時間勤務」66件(56%)であった。これらの結果から、就労している母親の多くは、短時間のパートやアルバイトをしていることが明らかになった。

3. 仕事と子育ての課題

仕事と子育てに関する12課題を示し、それぞれに「そう思う」「ややそう思う」「そう思わない」の3段階で回答を求めた。「そう思う」「ややそう思う」という回答をあわせて50%以上になった課題は「仕事がきつくて身体が疲れる」「自分の働きに比べて賃金が安い」であった。また「家族と話し合う時間が少ない」も48%であった。これらのことから、就労している母親は、子育てとの両立で、身体的・物理的課題を多く感じていることが明らかになった。

障害のある子を養育しながら就労している保護者(2)

— 就労していない保護者の悩みや思いとの比較 —

○伊藤由美・久保山茂樹・小林倫代
(独立行政法人国立特殊教育総合研究所)

I. 目 的

障害のある子どもの保護者は、様々な悩みや気持ちを抱えながら子育てをしている。本稿では、障害のある子を養育している保護者に対するアンケート調査から、子育て中に感じる悩みと生活全般への思いを取りあげ、就労の有無の観点から保護者の思いを比較した結果を報告する。

II. 方 法

1. 手続き 『養育者の生活スタイル調査(平成15年9～10月配布、12月回収)』のうち、子育ての実態に関する項目から「子育て中に困ったり悩んだこと」、養育者自身や家族に関する項目から「保護者が生活全般について感じていること」の2設問を取り上げ分析した。

2. 調査対象 北海道旭川市、福島県いわき市、群馬県藤岡市、横浜市、富山県黒部市、静岡県沼津市、山口県(8地区)、福岡県古賀市の8地域に在住する10歳以下の障害のある子どもを養育している保護者を対象とした。回収数は382、回収率46.0%であった。

回収数382件のうち、就労の有無について回答のあった372件を2群(「就労している」(127)「就労していない」(245))に分類した。

III. 結 果

1. 子育て中の悩み

設問「お子さんを育ててこられて、今までにどんなことに困ったり悩んだりしましたか」について12項目を設定し「よくある」「少しある」「ほとんどない」の3段階から選択回答を求めた。項目ごとに「よくある」と「少しある」の回答数を合計し、「就労している」群と「就労していない」群の別にその割合を比較した。

その結果「よくある」と「少しある」の合計の割合は、12項目中9項目で「就労していない」群の方が高かった。特に高かったのは「我が子は育てにくい子だと感じて」「近所の人に子どもを比べられて」「子育てから離れて自由になれないと」「子どもの具合が悪いとき手助けしてもらえなくて」の4項目であった。一方「就労している」群の方が高かったのは、「家族からもっと子どもの世話をするようにいわれて」「近所に子どもを遊ばせるところがなくて」の2項目のみであった。

2. 生活全般で感じていること

設問「生活全般において、最近、次のように思ったり感じたりすることがどれくらいありますか」について16項目を設定し「よくある」「時々ある」「あまりない」「全くない」の4段階から選択回答を求めた。項目ごとに「よくある」と「時々ある」の回答を合計し、「就労している」群と「就労していない」群ごとにその占める割合を比較した。

その結果、16項目のうち差が大きかったのは、順に「がんばりの割に生活が楽ではない」「今の生活は同じことのくり返しばかりだと感じる」「小さなことでイライラしてしまう」「自分が世の中の動きから切り離されているように感じる」「自分のやっていることが意味のあることなのか疑問に思う」の5項目であった。特に「がんばりの割に生活が楽ではない」では約20%の差がみられた。このうち、「がんばりの割に生活が楽ではない」を除く4項目は就労していない保護者の方が「ある」と感じているという結果であった。

IV. 考 察

以上の結果から、就労せずに障害のある子どもを養育している保護者の方が子育て中に悩みを感じる事が多く、逆に就労している保護者の方が生活全般に対しプラスにとらえていることが分かった。この結果は“就労している母親の方が子育てに対する不安が若干低い”という障害のない子どもの保護者に対する調査結果¹⁾とも一致するものであった。

文献：1)日本小児保健協会(2000)：平成12年度幼児健康度調査結果報告書

障害児を抱えて就労している保護者へのインタビュー調査(1)

— 『就労に関するインタビュー調査』の概要と基本データ—

○小林 倫代 ・ 久保山 茂樹 ・ 伊藤 由美

(独立行政法人国立特殊教育総合研究所)

key words: 保護者, 子育て支援, 育児と仕事のバランス

I. 調査の目的

これまで障害のある子を養育している保護者は、好むと好まざるに関わらず、障害児を中心とした生活を余儀なくされてきていたように思われる。しかし、最近の社会の風潮からは、障害のある子どもを養育しつつ、就労している保護者も増えてきている。また、支援体制は地域によって異なり、利用できる機関やサービスにも違いがある。

そこで就労しながら障害児を養育している保護者を対象とし、生活の実状や心情についてインタビューすることで、就労しながら障害児を養育している保護者が必要としている支援には、どのようなものがあるのかを明らかにすることが本研究の目的である。

本稿では、『就労に関するインタビュー調査』の概要を明らかにすると共に、その基本データを報告する。

II. 調査方法等

1. 調査対象 北海道旭川市・福島県いわき市・群馬県藤岡市・横浜市・富山県黒部市・静岡県沼津市・福岡県古賀市にある7カ所の障害児関係機関に所属する職員の紹介で、インタビューに協力していただける障害児を養育しながら就労している保護者55名を対象とした。調査期間は、平成16年8月～平成17年2月である。

2. 調査方法 研究の趣旨を十分理解している3人の研究者が、個別に半構成的なインタビューを行った。インタビューに要した時間は1時間から1時間半程度であり、対象者の了解を得て、応答を録音し、調査後に整理した。

3. 調査内容 インタビュー調査では、次の5項目を軸にして聞くこととした。①家族の状況(家族構成と年代・父親の協力)、②子どもの実態(子どもの障害)、③就労の実態(雇用形態・職業・勤務時間・収入・仕事の継続)、④仕事に対する思い(仕事を続ける上での不安や不満・大変だったこと・良かったこと・仕事をするこのイメージ)、⑤仕事を続ける上で必要だと思われる支援等

III. 基本データの概要

1. 家族の状況

①同居している人数 4人家族が26件で最も多く、次いで5人(10件)であった(表1)。

②母親の年代 30代の母親が36件(64%)、40代16件(29%)であった(図1)。

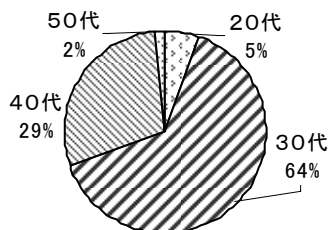


図1 母親の年代

表1 同居人数

| 同居人数 | 件数 |
|------|----|
| 3人 | 9 |
| 4人 | 26 |
| 5人 | 10 |
| 6人 | 6 |
| 7人 | 3 |
| 8人 | 1 |
| 合計 | 55 |

③父親の協力 父親の協力を「協力していない」から「とても良く協力する」の5段階に分けて整理した。一人親家庭が7件あり、それを除くと半数以上が協力的である。

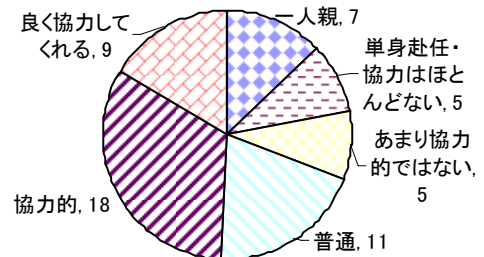


図2 父親の協力(数値は件数)

2. 子どもの実態

障害のある子どもの年齢は0歳から12歳までであり、就学前(0～6歳)が30名、就学後(6～12歳)が27名(きょうだいが2事例)であった。その障害は、知的障害・肢体不自由・広汎性発達障害等様々であった。

3. 就労の実態

①雇用形態 パートタイマーが半数以上を占めている(図3)。

②職業 保育士・教員等の専門的・技術的職業に就いている人が16名で、対象者の中で最も多かった。

③仕事の継続

78%の回答者が今の仕事を続けたいと思っており、常勤の仕事に変わりたいと思っている人も7%いる(図4)。

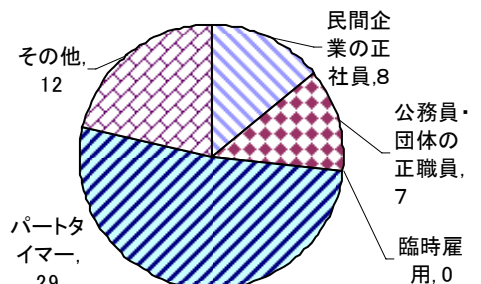


図3 雇用形態(数値は件数)

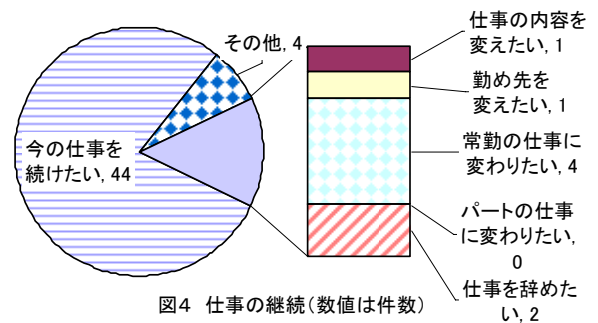


図4 仕事の継続(数値は件数)

今回の一連の発表は、『就労に関するインタビュー調査』の全体的な傾向を報告したが、今後は、地域別、家族の状態別、子どもの障害別等にこれらのデータをさらに詳細に分析を進めていきたい。

(KOBAYASHI Michiyo・KUBOYAMA Shigeki・ITO Yumi)

障害児を抱えて就労している保護者へのインタビュー調査(2)

— 仕事への意識 —

○久保山 茂樹 ・ 小林 倫代 ・ 伊藤 由美

(独立行政法人国立特殊教育総合研究所)

key words : 保護者, 子育て支援, 育児と仕事のバランス

I. はじめに

障害のある子どもを育てながら就労している保護者（特に母親）に関する実態は明らかになっていないことが多く、就労している保護者への支援は十分とは言えない。本稿では、育児と仕事の両方を行う際に直面する課題や、仕事をすることの利点やイメージについてインタビュー調査から検討した結果を報告する。

II. 手続き

『就労に関するインタビュー調査』（平成16年8月～）のうち、「これまで仕事を続けてきて、大変だったことはどんなことですか」「これまで仕事を続けてきて、よかったことはどんなことですか」「仕事をするに対するイメージを教えてください」の3項目について、保護者の回答内容を分類しカテゴリー化した。

III. 結果

1. 仕事を続けてきて大変だったこと

質問項目「これまで仕事を続けてきて、大変だったことはどんなことですか」に対する回答68件を、11カテゴリーに分類した(表1)。

「休みがとりにくい」

表1 仕事を続けてきて大変だったこと

| | |
|----------------|---|
| ①休みがとりにくい | 9 |
| ②仕事上の問題・苦勞 | 8 |
| ③休まざるを得ないことが多い | 7 |
| ④預け先探しや預け先での問題 | 7 |
| ⑤疲れる・余裕がない | 7 |
| ⑥子どもへの負担 | 7 |
| ⑦療育や指導に通いにくい | 5 |
| ⑧土日・長期休みの対応 | 3 |
| ⑨送迎が負担 | 3 |
| ⑩祖父母への負担 | 2 |
| ⑪きょうだいへの負担 | 2 |

「仕事上の問題・苦勞」

が上位をしめた。これらは子どもの障害の有無に関係なく回答される内容であろう。しかし、子どもの通院、親子通園、通級のため仕事を「休まざるを得ない」(③)、反対に、仕事のため「通級を休ませた(⑦)」など、仕事と療育・指導との両立に苦慮している回答が見られた。また『園選びが難しい』『安全上の理由で学童を断られた』『園での対応がうまくいかない』など預け先探しの難しさ等(④)が回答された。これらは、子どもに障害あるために生じる大変さと言えるであろう。さらに『その日その日いっぱいいっぱい大変だと思うゆとりがなかった』『疲れると子どもにあたってしまう。時間に追われている感じ』(⑤)など深刻な状態を訴えた保護者もいた。

一方で『大変なことはない』と回答したり、『職場の人が理解してくれている』などと語って、大変さを示す内容を回答しなかった保護者が8名いた。これは本質問に対する上位の回答カテゴリー(①②)とはほぼ同数であった。

2. 仕事を続けてきてよかったこと

質問項目「これまで仕事を続けてきて、よかったことはどんなことですか」に対する回答111件を、12カテゴリーに分類した(表2)。

「気持ちが切り替えられる」「いろいろな人と出会える」「子どもから離れられる」「誰かと話ができる」が上位を占めた。これらは育児から離れ、一個人として過ごす時間の大切さを示す内容であり、「収入がある」という生活上必要に迫られた内容よりも回答が多かった。

また『仕事をしていると子どもから離れられる。自分の時間を持ち、気分転換できる。そうすると子どもと接する喜びが大きい』のように、子どもから離れ(③)、気持ちを切り替える

(①)ことが結果的に子どもと向きあう意欲につながるという内容の回答が多数見られた。気持ちを切り替えるものとして、人との出会い(②)や誰かと話すこと(④)を挙げ、その結果として視野が広がり(⑤)、様々な情報が入手できる(⑦)という回答が見られた。

他方「仕事を続けてきてよかったことはない」という内容の回答をした保護者は1人もいなかった。

3. 仕事のイメージ

質問項目「仕事をするに対するイメージを教えてください」に対する回答90件を9カテゴリーに分類した(表3)。上位を占めたのは「自立する・自己実現」と「生活のため」で、ほぼ同数であった。「生活のため」すなわち経済的なイメージを挙げた保護者は全体の3分の1弱であった。それ以外の回答は最上位の「自己実現」も含め、『妻

母だけではなく1人の人間として存在する(⑤)』『結局仕事好きなんです(⑥)』『結婚する前から専業主婦は嫌だと思っていた(⑨)』など、仕事を経済的なイメージではなく、自分に不可欠なものとしてイメージした回答が多く見られた。そうした回答の中には『仕事をしている中での子育てだと思う』と『母として、妻としての部分は大切にしたい。その上での仕事だと思う』といった対照的なものもあった。どちらの回答も、保護者が育児と仕事のバランスを常に意識しながら生活していることを示していると言えるであろう。

IV. おわりに

障害のある子どもを育てながら働く保護者には、休暇や預け先の問題など大変さを生じさせる要因が多数あり、職場環境の整備や公的支援の充実が必要である。しかし、本調査の対象者は全員が仕事を続けてきたよさを語った。よさとは経済的な面ばかりではなく、子どもから離れ一個人として社会に出ること等であった。多くの保護者が、就労することでリフレッシュして子どもと向きあえるなどと語り、仕事と育児を対立するものとは捉えていなかった。保護者が求めている具体的な支援についてさらに検討していきたい。

(KUBOYAMA Shigeki・KOBAYASHI Michiyo・ITO Yumi)

表2 仕事を続けてきてよかったこと

| | |
|--------------|----|
| ①気持ちが切り替えられる | 18 |
| ②いろいろな人と出会える | 14 |
| ③子どもから離れられる | 12 |
| ④誰かと話ができる | 12 |
| ⑤視野(世界)が広がる | 10 |
| ⑥収入がある | 10 |
| ⑦情報が入手できる | 9 |
| ⑧前向きに生きられる | 8 |
| ⑨自分の時間が持てる | 7 |
| ⑩生活にメリハリ | 5 |
| ⑪子育て以外の自分 | 3 |
| ⑫生きがい | 3 |

表3 仕事のイメージ

| | |
|----------------|----|
| ①自立する・自己実現 | 16 |
| ②生活のため | 15 |
| ③リフレッシュ・ストレス解消 | 11 |
| ④人とかかわる | 10 |
| ⑤社会の一員である | 9 |
| ⑥働くのは当然・好き | 8 |
| ⑦子どもに働く姿を見せたい | 5 |
| ⑧生きがい | 4 |
| ⑨専業主婦は嫌 | 3 |
| ⑩その他 | 9 |

障害児を抱えて就労している保護者へのインタビュー調査(3)

— 悩みとサポート —

○伊藤 由美 ・ 久保山 茂樹 ・ 小林 倫代

(独立行政法人国立特殊教育総合研究所)

key words: 保護者, 子育て支援, 育児と仕事のバランス

I. はじめに

障害のある子どもを育てている保護者は様々な支援を必要としている。しかし、地域により支援制度には格差があり、利用できる機関やサービスも十分とはいえないのが現状である。本稿では、就労している保護者へのインタビュー調査から、子育てと就労を両立させるために必要な支援体制を考えるための一助としたい。

II. 手続き

『就労に関するインタビュー調査』（平成16年8月～）のうち「仕事を続ける上で必要だと思われる公的支援、制度は何ですか」に対して語られた内容から、保護者の求める支援・制度について取り上げ、9つのカテゴリーに分類した。分類した内容は「送迎」「学童など受入れ場の確保」「専門機関の充実・受入れ時間の延長」「福祉情報の整理と提供」「制度の見直し/環境整備」「学校での障害理解と支援」「職場における子育て支援の充実」「保護者のための場の確保」と「特になし」である。

なお、結果は全体の傾向を保護者の声と共に示した後、子どもの就学前後による違い、保護者の就労形態による違い、の2視点から傾向を整理した。

III. 結果

1. 全体結果

「保護者の求める支援・制度」について得られた回答は、表1の通りである（回答はのべ121件）。

表1 保護者の求める支援・制度

| | |
|----------------------|----|
| 送迎（スクールバス/ボランティアの利用） | 12 |
| 受入れ場の確保(学童など場の設置と充実) | 42 |
| 専門機関の充実・受入れ時間の延長 | 12 |
| 支援費制度など福祉情報の整理と提供 | 17 |
| 制度の見直し/環境整備 | 17 |
| 教員および学校全体での障害理解と支援 | 9 |
| 職場における子育て支援の充実 | 4 |
| 保護者のための場の確保 | 2 |
| 特になし | 6 |

全体的には、保護者から『学童にもっと予算をつけて障害児でも通えるようにしてほしい』『学童にも専門家がいると安心して預けられる』『保育を延長してほしい』など、就業および保育時間外に子どもを預けることのできる場の設置や、緊急時の受入れについて支援の充実を求める意見が最も多かった（42件）。次に『行政は制度のことを聞くまで教えてくれない』『色々な手続きの仕方をまとめて説明して欲しい。足を運ぶ場が多すぎる』『支援費制度の利用範囲が限られていて必要なことに使えない』といった制度の見直しや福祉情報の整理と提供を求める意見が多かった（共に17件）。また送迎についても、『子どもの通級に連れて行ってくれる人がいるとよい』『学童を利用するとバスポイントまで送迎しないとイケない』と12件の意見があり制度化への要望の声が多かった。

2. 子どもの年齢による要望の違い

全回答を、子どもの年齢（「就学前」及び「就学後」）で分類した結果を図1に示した（障害のある子どもを複数持つ保護者がいるため回答はのべ128件となった）。就学前の子どもを持つ保護者は「福祉情報の整理と情報提供」を求めることが多く、就学後の子どもを持つ保護者は、「送迎」「学童など受入れ場の確保」「学校での理解と支援」を求めることが多かった。

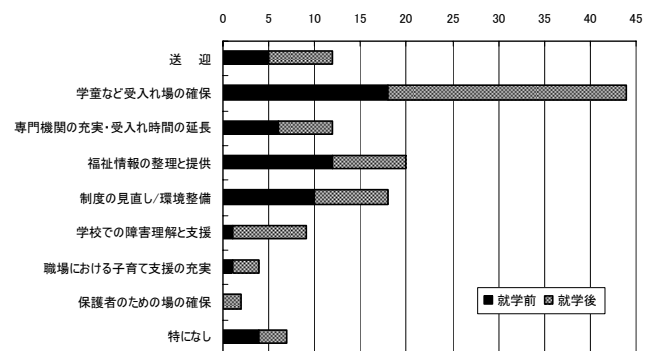


図1 子どもの年齢による要望の違い

3. 保護者の就労形態による要望の違い

全回答を、保護者の就労形態により5つに分類した結果を図2に示した（回答はのべ121件）。パートタイムで就労をしている保護者の多数が「学童など受入れ場の確保」を求めている。また、常勤雇用で民間企業に勤める保護者からも「子どもの受入」について希望が多いことがわかる。一方、「支援費制度など福祉情報の整理と提供」を充実させて欲しいという希望は、パートタイムに続き公務員の保護者に多かった。

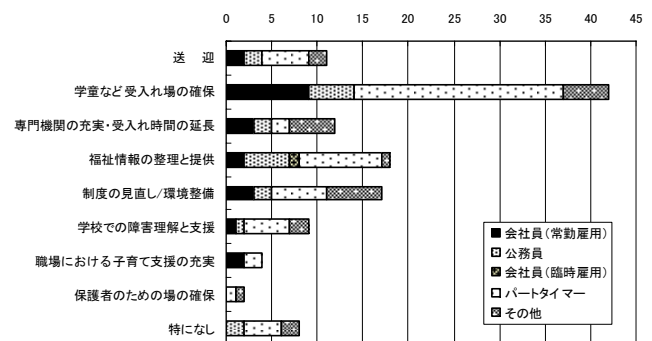


図2 保護者の就労形態による要望の違い

IV. おわりに

時間的な制約を感じながら就労している保護者が多く、放課後や長期休み時の子どもへの受入れ、通級や療育センターへの送迎といった、保護者の時間を確保するためのサービスや体制づくりが求められていることがわかった。今後は、子育てと就労を両立できるような支援内容について具体的に検討していきたい。

(ITO Yumi · KUBOYAMA Shigeki · KOBAYASHI Michiyo)